

フランス文学道しるべ

リットン・ストレイチー

片山正樹 訳



筑摩叢書 258

筑摩叢書 258

フランス文学道しるべ

リットン・ストレイチー

片山正樹訳



筑摩書房

片山正樹 (かたやま まさき)

1929年 大阪に生まれる

1952年 京都大学卒業 フランス文学専攻

現 在 関西学院大学文学部教授

訳 書 バタイユ「ドキュマン」

コレット「さすらいの女」

ラルポー「恋人よ幸せな恋人よ」

サン＝ジョン・ペルス「流謫」

スーポー「流れのままに」他

フランス文学道しるべ

筑摩叢書 258

1979年9月25日 初版第1刷発行

訳 者 片 山 正 樹

発 行 者 関 根 栄 郷

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

電話 東京 (291) 7651 (営業)

東京 (294) 6711 (編集)

振 替 東 京 6-4123

郵 便 番 号 101-91

©1979 Printed in Japan

1098-01258-4604

理想社印刷・永興舎製本

目次

第一章	起源——中世期	3
第二章	ルネサンス	20
第三章	過渡期の時代	35
第四章	ルイ十四世の時代	53
第五章	十八世紀	120
第六章	ロマン主義運動	178
第七章	批評の時代	209
結語		220
*		
訳者あとがき		225
書誌略解		xiii
作家・主要作品年表		vii
索引		i

フランス文学道しるべ

第一章 起源——中世期

ゴール地域におけるローマ文明の廃墟のなかで、しだいにフランス国が誕生し始めたとき、それにつれて一つの新しい言語がゆっくり進化していった。フランス国家の形成には種々複雑な要素が働いたのにひきかえ、この言語の起源は単純である。ごく少数の例外を除いて、フランス語の語彙のなかのどの語も、すべてラテン語に直結したものである。ローマ軍占領より以前のケルト語の影響はほとんど認められない。またフランク人の征服者たちによって持ちこまれた言葉の数も、せいぜい数百にしか達しない。この点でフランス語は英語と興味ぶかい対照を示している。英語の場合は、サクソンの侵入者たちが、ローマ人による占領の痕跡をほとんど完全に抹殺してしまった。しかしながら、サクソン人の言語は、最初に勝利を収めたものの、最後にはラテン語の影響を徹底的に受けるに至った。その結果、英文学はあらゆる面でこの二重起源の特徴を身に帯びることになった。それに反して、フランス文学はまったく同質のものから成っている。

このことがどこまで有利であるか、あるいはその逆であるかは、簡単に言えることではない。しかし、英国の読者が注意せねばならぬ重要な事実は、このような大きな相違が、フランス語と自国語とのあいだに存在しているということだ。英文学であれほどまでに支配的な役割を果してきた多様性、対照、奇抜な空想などの効果を、英国の作家たちが獲得できたのは、英語が複雑な起源を持っているせいである。ラテン語というただ一つの祖先から出たフランス語は、正反対の方向——単純、統一、明晰、抑制という点で、もっぱらその精髓を発揮してきた。

このような特徴の一部は、現存しているフランス最古の文学作品——《武勲詩》シヤンソンド・ジヌストのなかにも、すでに明瞭にあらわれている。それらの詩篇は、叙事詩ふうな物語詩のいくつかの集団、すなわち叙事詩群シヤンソンドから成立している。最初つくられたのは十一、二世紀ごろのことと思われる。その後も、模倣や焼直し、そしてついには低俗化というように、さまざまな形式で中世期全体を通じて生産がつづけられた。もともとは、筆記されたものでなく、朗誦されたものであった。作者は放浪の吟遊詩人たちであり、彼らは、はるか昔の縁日や巡礼地に集った群集を聞き手にして、さらにさかのぼる過去のラテン語による年代記や修道院の伝説などに材料を得た、恋愛や冒険の長い物語を語り聞かせたのであった。それらの詩のなかで、もっとも古く、名高く、立派な作品は、「なべての麾下の貴族」を引きしたがえたシャルルマーニュ大帝と、サラセン族の大軍との合戦という架空の事件を物語った『ロランの歌』である。現実ばなれした部分——シャルルマー

ニュの年齢が二百歳とか、天使の加護とか——などは別として、作品全体の雰囲気は、その貴族的な社会といい、未開的な活気といい、残虐性といい、さらには神をうやまい名譽を重んじる気高い感情といい、まさに十一世紀フランスの雰囲気である。この詩の美しさは、その文体のきわだった簡潔さにある。ホメーロスふうのきめの細かさや変化の妙は、痕跡すらなく、また、ウェルギリウスやダンテふうの磨きのかかった文学的手腕には、ますます無縁のものだが、それにもかかわらず、『ロランの歌』をつくった無名の吟遊詩人は、まぎれもない芸術的才能をそなえていた。その構想は雄大で、その手法も大胆な自信のみられる仕事ぶりである。作者は、扮飾や美辞麗句の助けをいっさい借りることなく、その舞台となった闘争と英雄的行為の場面を、むきだしのまま、驚くほど生き生きと浮びあがらせることに成功している。そのもっともすぐれた個所——ロランとオリヴィエとの訣別のくだりや、有名なロランの死の描写——では、抑制された切切たる哀感がまことに崇高なものに到達している。この偉大な作品——殺伐とした、赤裸々の、不気味な、荘嚴な作品——は、今日の読者にとっては、さながらフランス文学の地平線のはるかかなたにそびえ立つ、太古の花崗岩の巨塊のおもむきがある。

《武勲詩》がその価値にむらのある多数の叙事詩群として発展していた一方で、これとは違った影響のもとにつくられた物語詩の別の一群が出現した。それらは《ブルターニュ系物語》と呼ばれる韻文体の一連の騎士物語で、当時なおブルターニュやイングランドに残留していたケルトの

神話や伝説から着想されたものであった。これらの詩の精神と《武勲詩》のそれには大きな相違がある。《武勲詩》は、実証的で、明確で、唯物的なフランス精神の典型的産物であった。他方は、ケルト人の夢想と、神秘と、ロマンチックな精神がすみずみにまで沁みこんだものなのだ。その土台になっている諸伝説は、大部分がアーサー王とその騎士たちの物語を中心に展開したものである。それらはランスロットの異様な冒険について、《聖杯》の不思議な追求について、トリスタンとイゾルデの感動的な宿命の恋について語る。これらの物語はフランスで非常な人気を博したが、やがてその本来の性格を失ってしまった。十二世紀末に筆をふるった達者な人気作家クレチヤン・ド・トロワ CHRETIEN DE TROYES の手にかかって、これらの物語は新しい様相を呈するにいたった。その特異な神秘性は、魔法使いや妖術師の魔術といった常套的なものにすりかえられてしまい、さらに、その高尚な浮世ばなれした恋愛観も、ひどく気どった俗っぽい恋愛遊戯におきかえられてしまった。フランス文学のもっとも特色的なくつかの性格が、いかに早い時期に、いかに強力に打ちだされていたかを明瞭に示す例としては、ケルトの騎士物語の捉えどころのない空想が、フランス作家の手によって、文明社会の明快な優雅さに変形させられたこれらの経過にまさる例はない。

《武勲詩》も《ブルターニュ系物語》も、どちらも貴族の文学であった。そのあつかう対象は、当時の身分の高い貴人たちの生活と理想——戦場での武勇、騎士的な献身、高潔な廉恥心——な

どであった。だが、こんどはもっと平凡な庶民階級の生活状態を、短い韻文の物語にして描きだす別な形式の文学が発生してきた。《ファブリオ》とよばれるそれらのものは、総体的に、芸術作品としては大きな価値はない。その詩型は一般に貧弱で、内容もきわめて俗悪である。興味は主として、それらが、貴族的な武勲詩に負けず劣らず、フランス精神のもっとも恒久的ないくつかの特徴を明白に示している点にかかっている。徹底的リアリズムに対するフランス精神のちまえの愛好心と、辛辣な諷刺を操る独特の才能——それらの特徴が《ファブリオ》のなかに全面的に發揮されている。それらのうち一つか二つの物語で、作者がまともな感受性と趣味とにめぐまれたときには、驚くほど鋭い観察力とすぐれた心理描写の才能とが見いだされるのである。写実性と、外見が庶民的な点で《ファブリオ》に似ているが、それよりも遙かに繊細で機知に富んでいるのが、『狐物語』の名で知られている一群の詩で、これはこの時代の文学のなかで高い位置をしめている。これらの愉快な諷刺詩は、動物の社会に見立てた仮面のもとに、人間の男女の欠点やずるさを暴露しており、そのいくつかのうちに示された人間性や劇的手腕や自由自在な話術には、やがて四世紀ののちラ・フォンテーヌの『寓話』のなかに、見事に花を咲かせるあてやかな芸術を予想させるものがある。

この草創期から現在にまで伝わっているもう一つの作品があつて、これは《武勲詩》の荒けずりで大胆な精神とも、《ファブリオ》の文字どおりの写実性とも、完璧な対照をなしている。そ

これは『オーカッサンとニコレット』の（歌物語）（シャント・ラ・アル）（すなわち、韻文と散文とのいりまじった物語）である。ここではすべてが繊細で優美である——魅惑的な芸術作品のもつ脆弱ながらも永久に滅びぬ美しさ。この無名の作者は、その軽快で透明な詩と、それにもまして優雅で詩的な散文によって、可憐な恋物語の甘美な雰囲気を創造した。作者が描いてみせるのは「ばら色の恋のうら若い目覚め」であり——一点の汚れも知らぬ美しい姿で、自分たちだけのすばらしい世界をさまよう若い二人の、幸福な、かわい、まるで幼児のような情熱である。愛する乙女に想いをはせつつ戦場へと馬を進める若者オーカッサン、夜空の星のあいだに恋人の輝く姿をおおぎみるオーカッサン——

Estolette, je te voi,

Que la lune trait à soi;

Nicolette est avec toi,

Maniète o le blond poil.

小さな星よ、ぼくは見ている
月がおまえを引き寄せている
そこにいるね、ニコレットは

金髪のぼくの恋びとは。

恋の悦びが許されぬならば天国の悦びをも見捨てようというオーカッサン——

En paradis qu'ai-je a faire ? Je n'i quier entrer, mais que j'aie Nicolette, ma très douce amie que j'aime tant... Mais en enfer voil jou aler. Car en enfer vont li bel clerc et li bel chevalier, qui sont mort as tournois et as riches guerres, et li bien sergant, et li franc homme... Avec ciaux voil jou aler, mais que j'aie Nicolette, ma très douce amie, avec moi.

天国になど用はない。ぼくがこれほど恋いこがれているといふ乙女ニコレットと一緒になれないのなら、天国にのほりたいとは思わない……むしろ、地獄へ落ちたいくらいだ。なぜなら地獄へ落ちるのは、立派な学僧、騎馬試合や華々しい合戦で死んだ立派な騎士、それに勇敢な兵士や、貴族たち……こんな人たちとともに、ぼくは地獄へ落ちよう。これほど恋いこがれているといふ乙女ニコレットと一緒になれないのならば。

——大胆で同時に純情、官能的で同時に精神的なオーカッサンは、ちょうど情熱と活気にあふれたロメオが文芸復興期の恋人の理想的典型であるように、中世紀の恋人の理想的典型である。

しかしこの詩は——というのは、散文の部分があるにせよ、この可憐な作品は事実上まさに一篇の詩であるから——全体が情緒と空想でできているわけではない。作者は、写真あるいは非現実という正反対の挿話をあちこちに巧妙にばらまいている。そして、活気ある対話をたてつづけに物語のなかに織りこみ、鋭い観察力を駆使して、その非現実的な空想に、たえず現実世界との接触をたもたせることに成功している。ニコレットが牢屋から抜けだして、素足のまま草原を急ぐとき、踏みしだかれた雛菊が彼女の足の白さのもとでは黒く見える、という描写などは、空想と写真と、美と真実とを結びつける作者の能力の見事な一例である。『ロランの歌』と並んで『オーカッサンとニコレット』は、——文体こそまるで違うものであるが——この草創期のフランス詩のもっとも価値あるものを代表している。

十三世紀とともに、あらたな、そしてこの上なく重要な発展——すなわち散文の発展が始まる。この世紀のはじめに書かれた、ヴィルアルドゥワン VILHARDOUN の『コンスタンチノーブル征服』は、それ以後フランス文学におびただしく出現した歴史的回顧録のさがけであり、『オーカッサンとニコレット』の詩的散文と異なり、あるがままの物語の簡潔平明な文体で書かれている。この作品は傑作のなかに数えられるようなものではないが、しかしその誠実なところに魅力があり、無邪気なむかしの人のもっている快い味わいがある。ヴィルアルドゥワン老人には、どこことなくヘロドトス〔ギリシアの歴史家。史実の正確よりも、小説的記述の興味で知られる〕に似た、何かほほえましい（純真さ）^{ナイヴェテ}が、何か

ロマンチックな好奇心が見うけられる。そして、その謹厳で無味乾燥な叙述にもかかわらず、ときには、その文章のなかに色彩と運動の感覚をもちこむことを彼は心得ている。十字軍の大艦隊がコルフ島から船出するのを描写したなかに、「こんな見事な文章がある。『Et le jour fut clair et beau: et le vent doux et bon. Et ils laissèrent aller les voiles au vent.』」や、「その日は快晴で、風もまた絶好であった。そして、彼らは順風に帆を上げた。』キリスト教徒の貴族たちが初めて接し、驚歎の眼をみはったコンスタンチノープルの光景の描写はあまねく知られている。『Ils ne pouvaient croire que si riche ville pût être au monde, quand ils virent ces hauts murs et ces riches tours dont elle était close tout autour à la ronde, et ces riches palais et ces hautes églises... Et sachez qu'il n'y eut si hardi à qui la chair ne frémit; et ce ne fut une merveille; car jamais si grande affaire ne fut entreprise de nullo gens, depuis que le monde fut créé.』この街をぐるりと取り囲む、これら高々とした城壁や、堂々とした望楼を、さらにはこれら堂々とした宮殿や高々とした教会などを、彼らがまのあたりにしたとき、この世にかくも富裕な都市があろうとは信じがたいことであつた……そして胸ぶるいせずにはいた豪胆な者は誰もなかつたと御存知あれ。それも奇麗なことではなかつた。なんとなれば、天地創造このかた、かつていかなる人物も、かくも偉大なる事業をば企てたためしがなかつたのである。』はるかな時代を経たのちに、こういう文章に接すれば、どんな人でも、そのむかしの冒険のスリルを感じないでは済

まなはいはずだ！

興味の深さからいっても、重要性からいっても、これより一段とすぐれているのが、おなじ世紀のおわり近くに書かれたジョワンヴィル JONVILLE の『聖ルイ伝』である。この書の魅力は、その人間的性格にある。ジョワンヴィルは、みずからがその生涯の働きざかりの年月をあげて仕え、今なおその面影を敬愛する良き君主についての思い出を、打ちとけた対話調で、気軽に述べている。ルイ王〔ルイ九世。一二四一—七〇〕の言行、高貴な心情、聖者のような信仰——そういった事柄を、快い率直な好意でもって、しかも何ものにもとらわれぬ絶対の真实性をもって、語っている。しかもなお、ジョワンヴィルがその作品のなかに盛りこんでいるのは、彼の主君の性格ばかりではない。彼の著作は伝記であると同時にまた自己表示でもある。ヴィルアルドゥワンがその年代記のなかで、個人的感情の一端をも示そうとしないのに反して、ジョワンヴィルは絶えず自己を語っており、そのため、その作品には彼の個性が消しがたい痕跡を残している。この作品の魅力の大半は、彼がこのようにほとんど無意識のうちに表示する、彼自身とその主君との対照——快活で、常識家で、抜群に人間的な貴族と、厳肅で、高尚で、理想家肌の君主との対照——にある。ジョワンヴィルが、詳細に、興味ぶかく報告している二人の会話のなかで、この対照のもつ全幅の効果は、痛快なまでに發揮される。感覚と知性、煩惱と自己犠牲、世にも鋭い洞察力と世にも不合理な宗教的熱狂、そういう中世紀の奇妙な両反面を生むに至った矛盾する特徴が、この会話のな

かで、この二人の友人の性格のうちに圧縮され象徴されているのを、読者は、まのあたりに見る思いがするのである。

性質は違うとしても、これにおとらぬ完璧な対照が、十三世紀のもっとも重要な詩作品——

『ばら物語』のなかに見いだされる。この珍奇な詩の最初の部分は、ギヨーム・ド・ロリス GUILLAUME DE LORIS という若い学者の手になるもので、一時代まえにはクレチアン・ド・トロワの宮廷ふうロマンスに夢中になっていた貴族社会を目当てにして書かれたものである。一部はクレチアン・ド・トロワから、一部はオウィディウス〔ローマの詩人、代表作として『愛の技術』『変形転身物語』〕から想を得て、『愛の技術』の一種を創りだすことがロリスの目的であった。それも、貴族の読者の趣味にあわせて、博引傍証と、当時流行の形式的な恋愛遊戯とで念入りに飾りたてた当世版である。わずらわしい寓話の体裁をとっているこの詩が重要視される理由は、主としてそれが当時おおいに流行し、それ以後フランスで幾世紀にもわたって栄えた寓話詩の一派の源泉となったからである。ロリスはその作品の完成を見ずに死んだ。ところがこの作品は奇妙なかたちで完成される運命を持っていた。四十年後に、これまた若い学者のジャン・ド・マン JEAN DE MEUNG が、ロリスの残した四千行に一万八千行以上の自作の詩を付け加えたのである。この龐大な追加は、原作とまるで不適合であるばかりでなく、また完全に調子はずれのものであった。ジャン・ド・マンは、先輩の持つ洗練された貴族的雰囲気完全に捨て去り、当時の中産階級の現実主義と卑俗性をもって書いたの